



6月を3週が過ぎようとしております。

夏の自然の中での体験と考えての園外保育を計画しては行きましたが、行き届いた管理の元の園舎を離れるのを避けて、園庭や屋上デッキを使いました。

気温が高くなって来たので、激しくからだを使う活動の時はマスクを外して実施するようにしております。

■「ピンポンボール」と子どもが鳴って「おらせはーすー」と放送が入ると、どんな夢中にあそんでいてもピタリ止めて来たり座ります。聞き耳を立て、口を開ざし、

聞く事の大切さを知っているのです。物音が聞こえたら仲間入りします。

話に聞かせる言葉は「がまんが出来ると言事です。」

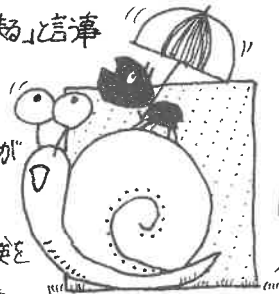
がまんが必要な時にがまんする事が出来れば、この幼児期に心を強く育てる事が出来るし、さまざまな体験をする事が出来て、その喜びは、次の意欲へと繋がります。

そうして、やがて迎える児童期と少年期に於いての大きな力になります。

そして、子どもたちにこの「がまんする力」が育ってなければ、どんな「子ども集団」になっているのでしょうか？

子どもたちは教えられるのでは無く、お互いに「育ち合っ」ているのです。子どもたちは、そのような環境の中で育っているのです。

「子どもは環境で育つ！」とありますが名言です。この雰囲気と大切にしたいです。家庭と幼稚園が力を合わせて、これからよろしくお願ひいたします。



■ コロナワクチンの接種の普及の遅れが話題になっている我が国ですが、高瀬幹の理事長は6月1日に1回目を、2回目は6月22日です。報告させて頂きます。若い方々に先だって接種出来る事は感謝々々です。

(心の育ちシリーズ) ひといちばい敏感な子

子どもには持って生まれた性格があります。大胆な子、好奇心旺盛な子などですが、「ひといちばい敏感な子」というのが最近急速に知られるようになってきました。こ言っているのは富山病院心療内科部長の明橋大二先生で、医学士HSCの子と言っています。

これは感覚的に人の気持ちにも敏感な子で、与人にひとくらの割合でいると、感覚的に敏感とは、ちょっとは物音と聞きかたたり、匂いや味にも敏感で、肌触りでもチクチクしたものは苦手です。

発達障害と誤解されることもあるが違います。発達障害の子は人の気持ちには気が付きにくく空気を読むのが苦手ですが、HSCの子はむしろ人の気持ちを分かりすぎるくらい分かります。ですから親や先生の気持ちを察知して、顔色を見てたり、他の子のつらい思いを自分のことのように感じて心を痛めたりします。

でも病気でなく障害でもありません。持って生まれた性格なのです。集団生活の中では、疲れることが多く、先生との相性を悪くしないに、いじめに遭っている訳でもないのに、園へ行こうとすると腹痛や頭痛を訴えたりします。

HSCの子は先生の叱り声が苦手です。自分が怒られていなくて自分が怒られている気持ちになったりします。

入園や進級でクラスが変わったり、担任が変わったりすると慣れるのに時間がかかります。

「母子分離不安」と言いつつ母親の過保護や保護希薄の問題と言われてきましたが、そうではなく、その子が持って生まれた気質という事もあるのです。

HSC子に必要な配慮は、全ての子にも必要ですよ！